

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 114 号
2020年 9月



第 171 回自然観察会:姥ヶ原の高原植物観察会

7月5日(日)第171回自然観察会・姥ヶ原の高原植物観察会を実施しました。参加者は20名でした。例年ですと、この時期は、爽やかな夏の陽ざしがあふれていることが多いのですが、今年は梅雨前線が停滞し、どんよりの曇りにおおわれた中での観察会となりました。また、都市部での新型コロナウイルス感染者が増加し始めた時期でもあり、皆さんマスクを準備された参加です。

早速、兔平駐車場から浄土平に至るアスファルト道路脇で、美しいベニバナイチヤクソウの歓迎を受けました。水滴で花の色は一層強調されて鮮やかです。浄土平から姥ヶ原までは、夏の高山植物の花の旬の時期とあって、登山道から多くの高山植物の花を観察することができました。火山後の時間経過とともに場所によって地形的な変化が見られ、それに適応した植物が植生していることがよくわかります。浄土平の礫地では、南限のイソツツジ、マルバシモツケ、ヤマタヌキラン、浄土平から蓬莱山のすそ野のミヤマハンノキ林ではオオバノヨツバムグラ、マイヅルソウや野生ランの花が見ごろを迎えていました。蓬莱山の急坂ではツツジの仲間の低木類が混生していました。中でもアカモノは斜面を被覆するように群落を形成し、その赤いガクは白い花冠を際立たせ、斜面は星が煌めいているような光彩を放っていました。



ベニバナイチヤクソウ



アカモノ

姥ヶ原からは霧の中の散策となりましたが、その分、時折、木道沿いに現れる花々の観察に集中しました。

姥ヶ原の高原植物観察会に参加して 池田恵子

7月5日(日)天気は曇。四季の里を出発すると、土湯街道は、霧で視界が悪い。果たして、山は雨なのか、晴れなのかとドキドキしながら、兎平駐車場へ向かった。上下カッパを来て歩いたが、ほとんど雨は降らず、風も無く歩き易かった。ただ霧で周りの風景が見られなかったのは、残念であった。

緑一色の山々。花はほとんど無いのではと思う程の深緑。しかし、花は次から次へと見つかる。兎平駐車場から浄土平へ向かう車道沿いに、ベニバナイチヤクソウの群生。ピンクの色も濃く、背丈も今まで見た中で、一番大きかった。車で通りすぎては見つけられ無いと思った。

登山道に入ると、キレイな水が流れている。石がゴロゴロあったり、地層が見えたり、火山の後だなあという風景。(吾妻小富士が出来たのは、5000年前位と推定されている)

この辺りの火山灰に、いち早く根付いた木は、ミヤマハンノキだそう。

イソツツジが満開で、火山性の石ころ地に形成された酸性の高層湿原に生育する低木性常緑樹であり、安達太良山域が南限となっている貴重種だそうである。そして、吾妻山に特徴的な五葉松が強風にさらされ一方になびき、枝がうちわの様に平面状になっていた。雄花があちこちに咲いていて、黄色かかったのやオレンジ、赤、ピンク、紫と様々な色があり一人、感嘆していた。

さて、登山道には観察する花が沢山ある。コケイラン＝別名ササエビネ。一部にのみあり、貴重な花だそう。鎌沼までの急な登り坂には、ツマトリソウ、ゴゼンタチバナ、イワカガミ、アカモノ、マイヅルソウ等が足元に次々と咲き、顔を上げるとヨウラクツツジやハクサンシャクナゲが目飛び込んでくる。鎌沼に近づくとき咲き始めたコバイケイソウやチングルマの花柱の群れ、咲き残っていたチングルマの白い花は、疲れを癒やしてくれた。

鎌沼は、霧でほとんど見えず、小雨の中の昼食。コロナ対策もあり、静かなランチタイムとなった。

午後は、酸ヶ平を通り、一周するコース。酸ヶ平のワタスゲは終わりに近かったが、池塘が沢山あり、木道と相まって、尾瀬にでも行った気持ちであった。下り坂も次から次と花が目に入る。イワカガミのピンク、ハクサンチドリ、マルバシモツケの白と淡いピンク、そして、五葉松の雄花の色々。飽きる事無く歩くことが出来た。下り坂も終わる頃、ミネヤナギの柳絮(りゅうじょ)で盛り上がる。種を運ぶ綿毛のことなのだが、流女＝女性をイメージしてしまうのである。

私は、姥ヶ原～鎌沼～酸ヶ平に来たのは、初めてでした。スカイライン＝観光ではなく、火山灰地から生育していく植生について説明を受け、様々な花に出会い、観察会の良さを感じた。会長はじめ、担当の青柳様、参加者の皆様、有難うございました。



イソツツジ



キタゴヨウマツの雄花



イワカガミ



ハクサンチドリ



コバイケイソウ



チングルマ



マルバシモツケ

自然観察会と私 林 和寛

私はうつ病である。もう3か月も仕事を休職している。うつ病になると

家から外に出られない

おフロには入れない

足の爪切りができない

下着の着替えができない

ハミガキができない

買い物に行けない

皿を洗えない

洗濯機をまわせない

洗濯できても物干しができない

そうじができない

おフロのバスタブの水を替えられない

となる。

一日のうち23時間はフンの上でモンモンとねがえりをうつ。あと1時間は、ソファで横になり、机の上でふせる事になる。できる事はトイレ、食事、睡眠だけである。食事もレトルトカレー、缶づめ、冷食があるうちはまだいいが、買い物に行けない。外に出ることができないため米だけたいて、しょう油、ミソ、マヨネーズ等で味付けする食事が3~4日間続く事になる。のりタマのフリカケでもあればそれはごちそうになる。いよいよ困つてくると、洗髪していないライオンのような髪にぼうしをかぶり、ぶしょうヒゲのムサイ顔にマスクをして深夜の客のいないコンビニにはうようにして食料の買い出しに出かける事になる。ホームレスのような風貌のためスーパーには行けない。客が多く売り場も広く買い物に時間がかかりレジにならぶうちに疲れてしまって体力がもたないためである。フロに10日間もはいれなくて、下着の着替えもできないでいると床は髪の毛でいっぱいになり皮膚病もでてくる。私は爪ミズムシになってしまった。何もできないうつ病だが腹だけはへるので食事だけはする。しかし、10日間もハミガキできないでいると歯周病になり、歯垢が歯にへばりつく。やむなく、うつ病が少し回復した時には、歯医者に行つて歯のクリーニングをしてもらふ事になる。

このうつ病、家に引きこもり病から少しでも遠ざかるためには、他人、社会の役割が大切だと感じる。やむをえず外に出なければならぬ状況がある事が、少しは引きこもり病から引き離してくれるように感じる。高山の会は楽しみながら家から私を引っ張り出してくれる強力な言いわけになる。高山の会に出席すれば楽しい仲間がいてくれて、気持ちよくもてなしてくれる。決して気分を害することも落ち込むこともゼツタイにない。物欲だけでは考えられない楽しさがある。年を取つて気力がなくなつてくると人間チャホヤしてもらいほめてもらわないと生きていけない事がよくわかる。鼓舞してくれる家族だったり、仲間だったりがないと寝たきり老人になってしまう。

病気になってみて、高山の会は私になくてはならないものだと思つて改めて気がつきました。高山の会の皆様、今後ともどうぞよろしくお願い致します(令和2年8月17日)。



ヒロオビトンボエダシヤク幼虫



ミヤマハンノキ林にて



コバイケイソウが咲いています



霧の鎌沼もいいですね



感動は分かち合うことで強まります

もりびとノート

自然観察会は、自然保護の基盤となる活動です。自然を理解し自然を大切に思う仲間を作るためには、自然を全身で感じて理解すること、参加者同士で気づきを分かち合うことが欠かせません。また自然とふれあうことは、心身の健康の維持や子どものすこやかな成長などにおいても重要です。

新型コロナウイルスの影響で外出や人と人との接触が控えられ集団活動がしづらい状況がありますが、**自然観察会を通じて続けてきた、自然とふれあいその気づきや喜びを分かち合う活動には普遍的な価値があると**私たちは考えています。(日本自然保護協会)

「樹木博士」に認定 福島・きぼっこの森 親子で観察会(2020年8月10日 福島民友朝刊)

福島民友新聞社は9日、福島市松川町の「きぼっこの森」でイベント「子供樹木博士」チャレンジ!2020を開き、参加者が森の木々に触れ、夏の自然に親しんだ。福島森林管理署の共催。「山の日」にちなんで開催しており、今年で7回目。県内の小学生と保護者約40人が参加した。

帰省したら「さっさと帰って」／青森市の民家に紙投げ込まれる(2020年8月9日 東奥日報)

墓参りなどのため東京都から青森市に帰ったOさんの生家に「何を考えてるんですか?」「さっさと帰ってください!!」など、帰省をとがめる内容の紙が投げ込まれた。都内に住むOさんは5日に帰省。7月末までに2度、自主的にPCR検査を受け陰性だったという。8日の取材にOさんは、「(紙を置いていった人が)考えるほど(自分は)無神経ではない」と憤った。今後さらにお盆の帰省者が増えることに触れ、「青森に来る人が嫌な思いをしないよう、**相手の気持ちになって考えてほしい**」と訴えた。

新型コロナウイルス感染者が急増しているのと対照的に国のアラートレベルは明らかに春季より低下しています。それでも、福島原発事故と同様に「**客観的な根拠**」を持って正しく**警戒**することが、**偏見や差別**を生まないために必要ではないでしょうか。「**根拠のないどんぶり勘定**」はいつの間にか変質してしまうのですから(もりびと)。

身体のものさし2 ～悲しみは人を休息させる～ 土井 昇

意識しない自然の呼吸の進退に触れる。仰向けに横になってもらい、水落に左手、丹田に右手を。チューニングの意味で呼吸を合わせ、吐く息に沿って静かに手を当てる。水落が一息ごとに柔らかくなり深く沈みこんでくる時は、弛みがうまくいっている。吐き切った後、丹田が息を吸い始めるまでの”間”が長くなる。十分に休息が得られ回復してくると丹田に張りが出て、次第に大きく息が入り身体の末端まで力が満ちてくる。弛みと緊まりがうまむ交代している場合だ。

水落ちは頭(意識)や胸(感情)の緊張に連動する。硬いと丹田の息が深くならない。弛まないために身体の自然なリズムが滞ってしまう。不安定になった身体はそれを解きほぐそうとおしゃべりや笑いを求めたりする。問題は解決しないが緩和はなされる。また、悲しみはさめざめと泣きあかすことで息を吐き続け、落胆は溜息をつくことで水落の蓋を開け、静かに底をつくほどに身体を休ませる。「休息」という言葉はこの時とてもリアルで、吐き切った息の後、長い”間”があくのだ。吐く息によって弛む時と、吸う息に連動して緊まるときの”間”を時間と呼ぶ。この”間”が大きければ大きいほど、弛みや緊まりが充分であったこと、そして次への転換が準備されてくる。

吐くことの効用は大。泣く、歌う、叫ぶ、笑う、おしゃべりする。長〜いあくび、ほっと一息……。身体が様々な吐息でリズムをとっていることに改めて気づかされる。丹田に手を当てていると動きが伝わってくる。母親と繋がって血液をもらい生命を育んできた臍の緒の奥にあり、呼吸もそこから展開している。生命のはじまりから膨らみ、しばむという基本的なリズム(運動)が内包され、生涯を貫いて私たちを支えている。

悲しみは人を休息させる。悲しみの大きさだけ休息も大きくなるが、その裏側で次の緊まり(行動)の力を呼び込んでいる。そして、丹田の奥でキュッと小さな緊まりが生まれ、それから息が吸い上がってきたら新しい時がきたのだ。



ミネザクラの涙

それは三十年程前のある日のこと。私はふと思った。自分は近頃どうも父親としての威厳をなくしているようだ。日頃何もせず怠惰な生活をしているせいかもしれない、ならばここで一発ガッとこまましてやろうと、小学生の息子たちを連れ一家四人で一切経山の登山に繰り出した。さあ出発だ、チーフリーダーは最後尾から隊員たちに、コースやペース配分を指示しながら登るつもりだったのだが……

浄土平から酸ヶ平を抜け避難小屋を過ぎて、姥ヶ原と鎌沼が望める高さまで登って来ると、隊員のひとりの姿が見えない。サブリーダーが後から登ってくる登山者に声をかける。「麦わら帽子を被り、首からカメラをぶら下げた人をみませんでしたか？」と尋ねると、「ああその人なら、そこの岩陰で足元の大地をじっと見つめて瞑想に耽っていましたよ」と教えてくれた。実はその瞑想に耽っていたのが登山隊長の私だった。隊員たちに命令しながら登るつもりが心臓バクバク、膝はガクガク挙句三人の隊員たちについていけずに、ついに大地を見つめることとなってしまった。9合目で待っていてくれたサブリーダーに追いつくと、ニヤニヤした顔で「充分瞑想して悟りは開けましたか？」と問われ、意味が分からず「なんだそれは？」と聞き返すと、先の話が聞かされた。私は悟りは開けなかったがプライドだけは十分に傷ついた。

また妻と二人で那須岳に登った時のこと。茶臼岳の頂上から朝日岳に向かう途中、今まで晴れ渡っていた空が一転俄かに暗くなり、突然バリバリッと大音響で稲妻が縦横無尽に空中を走り廻り、妻の顔は顔面蒼白腰を抜かささんばかりだ。めざす朝日岳の頂上に雷が落ちバリバリドーンと大きな音をさせて、岩峰が火を噴くように光るのが見えた。我々は近くの岩陰に避難し時を待つことにし、そこで私は震えている彼女の気を紛らわせようと学生時代の話だと言って語りはじめた。

「俺たちは山へ行って空が晴れて視界がよく、風がごうごうと音を立てて吹きすさんでいると大喜びするんだ、特に風に向かって歩こうとしてもまっすぐに歩けないような向かい風は大歓迎だ。今のザックは縦長だが当時のザックは幅広で横に長く大きかった。あれはそんな大風の時に風の抵抗を大きく受けて、下り坂では風に乗りフワァーと飛び上り、ピョ〜ン、ピョ〜ンと飛び跳ねながら稜線を楽に進むことができた。特に稜線上の鞍部なんかでは、上手い奴は頂上から頂上へまるでムササビのようにひとつ飛びしたものだ。俺はそこまでは上手くなかったけどね」と馬鹿話をする、思いがけず妻が話に喰いついてきた。「重い荷物を背負ったままで空を飛べるの？」「何言っているの、飛行機をしてみろ、あんな重い機体が人間を何人も載せて空高く飛んでるじゃないか、だからヒマラヤ遠征隊なんかは、気象学と一緒に航空力学も勉強してから行くんだぞ」と口からでませの上塗りをする、妻は「山男は体力勝負だけじゃないんだ」と一言。どうやら冗談話を本気にしたようだった。

古い友人に「若かりし日の妻は馬鹿だったのか、純情だったのか」と謙遜を交えてこのはなしをすると「そりゃ、お前の方が純情なのか、馬鹿なのかという話だ。俺は後者だと思うがね」と言ってニヤリと笑った。「大体お前のそんな与太話を信じる大人がいると思うか？小学校の子供だって信じないよ、きっとその時のお前が山に落ちた雷の轟音と稲光に怖気づいて、よっぼど恐ろしそうな顔をしたんだろう。それを見た奥さんが、お前の恐怖心を紛らわしてやろうと、その馬鹿々々しいはなしに乗ってくれたんだ。奥さんいい度胸をしているな、お前よりよっぼど強かだ」と言った。強かとは褒めているのか、貶しているのかちょっと気になったのだが、そう言われてみれば先の一切経山での言動と近頃の俺に対する態度を顧みると、その線も有りかなと思う今日この頃である。今ではいや以前から、いやいや最初から我が家では自称山男より、山の神の方が一枚上手で強かだったということか。くわばら、くわばら。



一切経山家族登山



霧の酸ヶ平

東北ブナ紀行（74）

奥田 博

今回も鬼首高原の外輪山である大柴山と花淵山のブナ林を紹介します。どちらの山も、ほぼ山形・宮城の県境稜線尾根に位置するため、偏西風の影響をまともに受けて、細いブナ・矮小化したブナが多く見られる。

113) 禿岳 1261m

禿岳は東北のミニ谷川岳と呼ばれているように、東側には雪庇崩壊による雪蝕地形がみられ、岩場が発達している。火ノ沢をはじめ東面には中ノ沢・水上沢など中上級の沢があり、若い頃に登った。またダイレクト尾根は、山頂付近から眺めても厳しい表情を見せているが、厳冬期にはいい岩登りの訓練になる、そんな東側であるが、西側にはブナの森が広がるが、登山道は無いので窺い知れない。

登山口の花立峠は、標高800m、標高差40m余登って小ピークまで行くと展望が広がる。夏の終わりに訪れた際には珍しいナンバンキセルが自生していた。

ここから先はブナの尾根を登ることになる。太いブナは無いが、厳しい季節風に耐えて生きるおしんブナが、多く見られる。将来、どんなブナに成長するのか、楽しみで未来の森と呼べそうだ。



ブナの森は山頂手前、9合目まで断続的に続く



コースタイム：花立峠（2時間）山頂（1時間30分）花立峠

114) 大柴山～花淵山 1083m

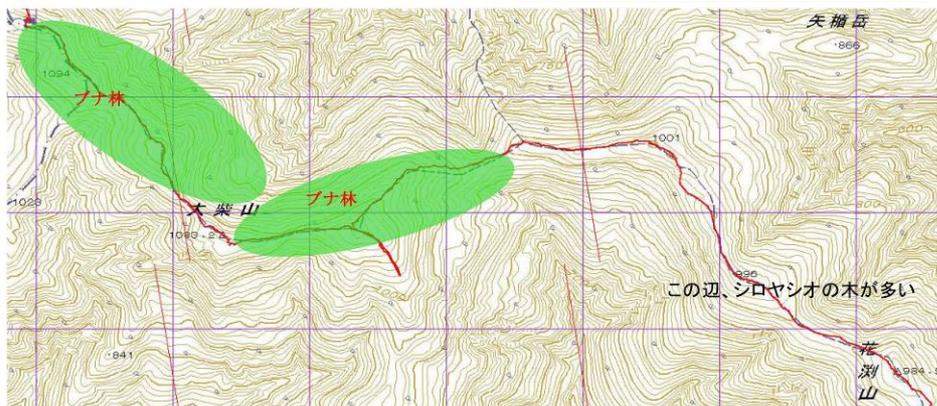
鬼首カルデラの外輪山南端にある大柴山と花淵山、鬼首スキー場の上部、禿岳同様尾根筋にブナ林が広がる。こちらは東西に伸びる尾根なので、禿岳の南北に伸びる尾根に比べると大ブナも見られるし、季節風の影響も見られる。

スキー場のテレキャビンで一気に、標高1100mの鍋倉山山頂まで運ばれてしまう。ここのキャビンは、安達太良山のゴンドラ同様、現在は夏期のみ運行している。以前の冬に、このキャビンを利用して、東面の深雪滑りを楽しんだが。

ゴンドラ駅が最高点で、ここから下り気味に歩き出す。もうブナの森の中を歩けるので、幸せを感じる。しかし東屋や案内板やベンチなど朽ちているのもあり、自然には不似合い・不要な人工物が展望台まで続く。その先は、次第に普通の尾根道に戻る。太いブナが点在しており撮影が楽しい。急な下りにかかる尾根は方向を変える。分岐から登り返すようになると、ブナは細くなる。

標高が千を切るころからシロヤシオの木が目立つようになる。春には見事なシロヤシオとなることだろう。やがて花淵山山頂到着する。少し先にはリフトの残骸もあるが、このまま鳴子温泉まで下ることも可能だが、ここは戻った方が無難。

コースタイム：ゴンドラ終点・鍋倉山（30分）大柴山（1時間40分）花淵山（2時間）鍋倉山



後半は細く若いブナが多くなる

この辺、シロヤシオの木が多い

吾妻・安達太良花紀行 82

佐藤 守

エゾアジサイ (*Hydrangea serrata* var. *yezoensis* アジサイ科アジサイ属)

吾妻・安達太良連峰のブナ林の沢や湿生地に植生する落葉低木。日本固有種。多雪地帯に植生する。エゾアジサイは日本に自生する他のアジサイ類との関係が不明でその起源は謎めいている。主として関東以西に分布するヤマアジサイの亜種とされていたが、最近、遺伝解析により本種はヤマアジサイとは独立した種である可能性が高く、三浦半島や伊豆半島等自生地の限られているガクアジサイが、遺伝的距離が近い可能性があることが報告された。ヤマアジサイは白花種で、エゾアジサイ、ガクアジサイと比べて花と葉の形態的な変異幅が大きい。

葉は十字対生で葉柄がある。葉身は広楕円形～卵状広楕円形、基部は広い楔形～やや切形、先端は尖り尾状に突出する。葉脈上には毛があり、葉縁には粗く鋭い鋸歯がある。ガクアジサイの葉は無毛で光沢がある。

花は頂生、新梢の頂部に散房花序を着生する。花序の周辺は大型の青色の装飾花で覆われ、中央部は小さな両性花が多数着く。装飾花の中央には小さな両性花が存在し、装飾花はガク片が大型化したものであることが分かる。両性花の花弁は5片で装飾花と同色を帯びる。雄しべは10個、葯は装飾花と同じ色である。雌しべは白色の柱頭が3、4裂する。小花柄と花糸も咲き始めは着色しているが開花後しばらくすると退色して白色となる。

アジサイの花色は体内にアルミニウムイオンがあると青色を呈し、アルミニウムイオンがないと赤紫色となる。土壤が酸性化すると土壤のアルミニウムが溶け、根からの吸収量が高まる。しかし、中性～弱アルカリ性ではアルミニウムが不溶化するので花色は赤紫色になる。森林土壌は酸性なので花の色は青色が普通である。しかし、上から下に青から赤紫に変化する群落が見られることがある。これは、多雨になると表層のアルミニウムが流亡するので、根の深さと地上部のアルミニウム量が対応していることを表しているのかもしれない。



オオカサモチ (*Pleurospermum uralense* セリ科オオカサモチ属)

吾妻連峰・谷地平の草原に隔離分布する多年生の高茎草本。一属一種である。シシウド、マルバダケブキとともに大型の広葉草原を形成している。カサモチ(傘持ち)は平安貴族の外出や行列の際に柄の長い大傘を持つ供人をさし、カサモチと俗称されていた漢方薬のセリ科植物より本種が大型であることから命名された。太い茎の先に大型の白い花環が集まった草姿は確かに長柄の大傘に似ている。

葉は対生。茎は太く、中空である。分岐せず葉が直接着いている。葉は1-3回3出羽状複葉で、小葉や終裂片は羽状に中裂し先端がとがる。葉身は無毛で薄くやわらかい。根出葉と下部の葉には長い葉柄がある。葉は一見するとミヤマセンキュウに似ているが、こちらは明らかな互生である。

花は頂腋生。直立した茎の先端に大型で傘状の複散形花序を形成する。小散形花序群が発生する基部に着く総苞片は広線形で羽状に裂けるが、それぞれの小散形花序基部の総苞片は線形で裂けない。小花は離弁花で5数性を示し、花弁数、雄しべ数ともに5である。花弁は白色で中央部に中肋のような筋が走る、雄しべは花弁の間の位置に着く。葯の色はやや青みを帯びた黒茶色である。シシウドの葯の色は赤味を帯びる。雌しべは開花始めの頃は花心部の膨らんだクリーム色の花盤の上に2個の柱頭が覗いている。セリ科の花は雄ずい先熟性であり、花は開花中に雄性期から雌性期に相転換する。開花すると雄しべの葯は花粉を出して間もなく落脱する。葯が落脱すると、花盤の分岐部からそれぞれ1本ずつ花柱が伸びる。

オオカサモチの花を求めて谷地平に通い、念願叶ったのは1999年のこと。それから20年ぶりに白い花傘を開いたオオカサモチに再会した。花傘の上では美しいアオジョウカイがデートや吸蜜活動に勤しんでいた。何かか花の上はオオカサモチの方がシシウドより賑わっていた。蜜の味が違うのだろうか。



第172回自然観察会案内：半田山自然林紅葉観察会

日時：2020年10月4日（日）8：30～15：30

集合場所 小鳥の森第一駐車場 集合時間 8:30 参加定員 20名

内容 半田山公園を起点に山頂を経由して周回し、晩秋の半田山自然林の紅葉を観察します。なお、恒例となっておりました芋煮会は新型コロナ対策のため今回は中止とします。

準備するもの 昼食、食器、登山靴・長靴等、雨具、帽子、手袋、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代(500円)、申し込み：10月2日(金)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後7時～9時でお願いします)。

半田山公園駐車場に、直接行かれる方は申込時にお知らせください。現地集合時間は9:20とします。

新型コロナウイルス感染を避けるため以下の点に留意してください。

- ・自宅を出る前に体調の悪い場合は、無理しないでキャンセルの連絡をください。
- ・自宅を出る前に検温をお願いします。
- ・マスクをご持参願います。

西吾妻登山道誘導ロープ取り外しボランティア(一般公募とNF米沢との共同で実施します)

1. 実施日：10月17日(土)6:30～17:00(雨天時10月18日に順延)
2. 定員 10名
取り下げ作業は時間がかからないので一般公募も含め、先着10名までとします
3. 内容 グランデコススキー場 Gondola 終点から西大巓に登り、西大巓山頂から西吾妻小屋までのロープ取り外し作業を行います。ゴンドラ代は全額参加者負担とします。
4. 集合場所・時間：四季の里正面入り口駐車場 6:30 現地(グランデコススキー場駐車場)7:30
5. 申し込み：10月15日(木)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメール(全員返信モード)にてお願いします。(電話申込は午後7時～9時でお願いします)



誘導ロープ設置により礫地にモウセンゴケ群落が再生した(水場入り口)
2020年8月4日

第173回自然観察会案内：信夫山自然林・陽だまり観察会と総会

日時：2020年11月23日(月・祝日)9：00～12：00、総会13：00～16：00

集合場所 信夫山公園駐車場 集合時間 9:00 (集合場所が分からない方は幹事へご相談ください)

参加定員 20名、総会は定員なし

総会会場 福島市働く婦人の家

内容 一昨年来の信夫山再生プロジェクトや除染廃棄物搬出を口実とした道路拡張により、花畑地区はコンクリート化がすすめられました。紅葉の信夫山自然林を散策するとともに、公園化整備の実態を検証します。散策後は総会です。

準備するもの 昼食、食器、登山靴・長靴等、雨具、帽子、手袋、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳、マスク

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代(500円)、申し込み：11月21日(土)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後7時～9時でお願いします)。

振込による会費の納入は、郵便振替02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

「高山」高山の原生林を守る会会報 第114号 2020年9月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP：<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：佐藤 守 Phone 024-593-0188(夜間7時～9時)

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費(1000円)を添えて上記まで

編集：佐藤・奥田